

モッセにみる「伝統の創出」

——トゥルネンは如何に「伝統」を創出したか——

釜崎 太*・波多腰克晃**

(2002年10月25日受付, 2003年1月8日受理)

“Invention of Tradition” Seen in Mosse

——How Was the “Tradition” of German Gymnastics Invented?——

Futoshi KAMASAKI and Katsuaki HATAKOSHI

This study is an analysis of the interpretation of the German Gymnastics of Mosse that was made from the perspective called the “Invention of Tradition.”

Modern society, which came into existence by dismantling the pre-modern community and respecting personal free will, formed the public's sense of community through the mythology and symbols found in rituals. In modern society, gymnasts such as Jahn have propagated nationalism and respectability by inventing German Gymnastics as the “Tradition of the Nation.” For the Germanic people, the traditions of ancient Greece and Christianity such as national monuments and public celebrations came to include also gym suits, flags, songs and physical beauty.

Key words: German gymnastics, Modern germany, Invention of tradition

キーワード: トゥルネン, 近代ドイツ, 伝統の創出

1. 序 論

歴史学的手法を採用したフーコーの哲学書『知の考古学』¹⁾, 歴史社会学の書として高名な『文明化の過程』²⁾をあげるまでもなく, 今日では歴史学, 社会学, 哲学といった社会諸科学の境界は極めて曖昧なものとなっている。近代的な枠組みが至る所で綻びを露呈させつつある現在, 近代科学制度の境界領域を開拓していく意義は極めて大きいといわなければならない。むしろ, 「研究」が制度的な「うち」「よそ」ではなく, どこまでも「真理」を問題にしているのであってみれば, 『「うち」』『よそ』的距離感からの解放³⁾が意識され始めた今日ほど, 制度の枠を超えた真理への道が開かれた時代はなかったというべきだろう。

とりわけ, 政治・経済研究の隆盛の陰に隠れ, 近

年ようやく脚光を浴びてきた文化研究は「社会学と人類学, それに歴史学の境界線を突破し, ディシプリンを越えた横断的な地平のなかで新たな文化研究の知を築いていく」⁴⁾可能性を内抱しているものであり, 現代の文化研究は「ディシプリンの純粋性の名のもとに, 何が排除され, 何が守られてきたのかを, 問い返すべき時期」⁵⁾にある。

社会学的な権力工学の視点からドイツ・フェシズムを分析する刺激的な歴史書を数多く残したジョージ・L・モッセは, インターディシプリンなトゥルネン解釈を提示している。それだけに, モッセのトゥルネン解釈を解体していく作業は社会学と歴史学の横断という意味だけではなく, 体育学と歴史社会学の横断という積極的な意義をもってくる⁶⁾。その端緒として, 本研究では, モッセの描いたトゥルネン

* 体育原理研究室, ** 日本体育大学大学院博士前期課程スポーツ文化・社会科学系

を「伝統の創出」という視点から再構成しようとする。

2. 「伝統の創出」と本研究の課題

「男子厨房に入るべからず」という言葉がある。男女同権が称揚されている今日でさえ、ある種の説得力をもってその言葉が語られているのは、それがわが国の伝統意識と強く結びついているからであろう。しかしながら、ルイス・フロイスの記憶を引きながら伊藤⁷⁾が示したように、戦国時代のわが国では多くの場合、女性ではなく男性が食事の準備をしていたのである。『伝統』とは長い年月を経たものと思われ、そう言われているものであるが、その実往々にしてごく最近成立したり、また時には捏造されたりしたものでもある。⁸⁾

ホブズボウムによって広く知られるところとなった「伝統の創出」は、端的には「顕在と潜在とを問わず容認された規則によって統括される一連の慣習であり、反復によってある特定の行為の価値や規範を教え込もうとし、必然的に過去からの連続性を暗示する一連の儀礼的ないし象徴的特質⁹⁾」と定義される。「伝統の創出」は儀礼性・象徴性と深く結びついているのである。

儀礼性・象徴性に関わる「伝統の創出」には、第一に、急速に確立され制度化された「伝統」という特徴がある。新しい状況に直面したときに「過去の状況」に言及するか、義務的な反復によって過去を築くことで伝統は発明される。伝統の発明によって、社会の革新と、その革新された社会のなかにある永遠不変な部分との構造化が起こる。例えばフランス革命は、「革命」の定義から言えば「過去を断ち切るもの」であるが、フランス革命でさえも自らにまつわる過去をもつ。新しい環境や価値観が劇的に変化するとき、社会的紐帯やアイデンティティの確保が必要になることは論をまたないが、伝統的な支配形態やヒエラルヒーが失効した近代社会ではとりわけ、新たな支配や忠誠様式が要求されることもみやすい道理である。したがって、政治的意図をもった組織によって伝統が発明される可能性は高い。「しかし同時に、その意図的創出が成功するかどうかは、どれほど一般大衆に受け入れられる形で伝えられたかに、主としてかかっている点に注意した方がよい。新しい国家の公式の祝日や式典や英雄や象

徴は、国家に雇われた人々からなる軍隊や学校に通っている子供たちには大いに浸透しうるが、それらも、もし一般大衆が純粹に受け入れることができる響きに欠けていれば、一般市民を積極的に動かすことはできない¹⁰⁾。

もちろん、近代社会の支配層は社会の安定を全面的に「伝統の創造」に頼ったわけではない。むしろ政治的現実により多くを頼っていた。しかしそれでも、「伝統の創造」は大衆を動員し、反社会的な思想を訓化したり孤立させるのに役立った。してみるならば、過去の社会秩序との急速な切断を迫られた後発近代国家にあっては、より多くの伝統が発明されたであろうことは想像に難くない¹¹⁾。我々は次節以下において、後発近代国家ドイツにおける「伝統の創出」をみていくことになる。

「伝統の創出」の第二の特徴には、「伝統」と実用的因襲・日常的慣例の相反関係があげられる。ホブズボウムは「因襲と日常慣例のネットワーク」と「創り出された伝統」を厳しく峻別している。例えば「日常的な用語」と「創られた伝統的用語」とはその意味内容が全く異なり、「日常的な衣装」と「創られた伝統的衣装」とはその意味を異にしている。「乗馬の際に堅めの帽子を被ることは、オートバイの運転手が転倒時用のヘルメットを被ったり、兵士が鉄製のヘルメットを被るように実際的な意味がある。一方、狩猟の際の桃色の服装に併せて特定の堅めの帽子を被ることはまったく別の意味がある。もしそうでなければ、軍隊—いくぶん保守的な機関—のヘルメットが、より優れた保護効果が示されれば違った形のものに取り替えるのが容易なように、『伝統的』な狐狩りの服装を変えることも難しいことではないだろう。実際、『伝統』と実用的因襲ないし日常慣例とは相反する関係となっている。¹²⁾

本稿では、以下、近代ドイツにおけるトゥルネンの「伝統の創出」について、象徴的・儀礼的特質の「過去との連続性」、**「伝統」と実用的因襲との相反関係**をとりあげる。しかし例えば成田が、トゥルネンでは「体育祭や遍歴や体育歌や体育服装、あるいは演説や言葉などがとくに重視され、仲間意識や国民意識の覚醒と高揚が企てられた¹³⁾」と語るように、トゥルネンにおける象徴性・儀礼性の重視はすでに定説となっている。モッセのトゥルネン解釈から何らかの示唆を引き出そうとするならば、トゥルネン

における①象徴性・儀礼性と「伝統の創造」、②象徴性・儀礼性と「近代ドイツ社会」との関係、に着目しなければならない。本研究の課題はここにある。

3. 国民的記念碑と公的祝祭

ナポレオン軍からの解放と祖国の統一という二重の課題を抱えた近代ドイツにあって「国民主義」の民衆への浸透は国家的な課題であった。その「国民主義」を浸透させたシンボルのひとつに「国民的記念碑」がある¹⁴⁾。例えばキフホイザー記念碑、国家記念碑、ウィリアム一世記念碑、ウィリアム一世像など、近代ドイツには夥しい数の国民的記念碑が建立されている。

前近代社会において王や将軍たちの榮譽のために建てられていた国民的記念碑には、近代に至って文化的次元が加えられ、詩人や作家の記念碑が含まれるようになる¹⁵⁾。文化的な次元で近代の国民的記念碑はシンボルを身につけたのである。近代において英雄の馬は平和の女神に導かれ、英雄には月桂樹が冠せられたが¹⁶⁾、それも芸術的・建築学的な美に根拠づけられていた。文化的次元のなかで国民的記念碑は「国民が賛同するはずの理想の具現化」とみなされるようになる¹⁷⁾。

文化的な次元にあった美の多くは、例えばベルリンの宮城橋のための意匠を設計したフリードリヒ・シンケルがギリシアの英雄を模倣することで、ナポレオンに対するプロイセンの勝利を祝ったように、古代ギリシア・ローマの美から採られた。トゥルネンの創始者であるヤーンもまた、古代ギリシア・ローマの美に彩られた国民的記念碑の建立を望んだ。「ヤーンもまた（1800年に）国民的記念碑の建築を提唱したが、その願望を歴史のロマン主義の魅力と結びつけた。（中略）ヤーンは、あらゆる世紀を通じあらゆる民族がギリシアやローマの神殿へ巡礼した以上、古典古代の記念碑は生きた範例として役立つと信じた。古典主義的伝統とロマン主義は単に国民意識の精神的高揚において互いに対峙しただけではなかった。両者は緩い総合として、あるいはむしろ共存において結びついた。この共存が、ドイツ人の国民精神とその崇拜を表現する方法を決することになった。」（括弧内引用者）¹⁸⁾ ヤーンはさらに、国民的記念碑の歴史意識を覚醒させるためにギリシア・ローマの神殿とエジプトのピラミッドを比較し

てみせる。「ヤーンはギリシア・ローマの神殿をエジプトのピラミッドと比較した。ピラミッドも長い時間を超えて残ったが、しかしそれが象徴した国民史は忘れ去られた。ギリシア・ローマの神殿は今なお栄光ある過去を具現していた。古典主義的なものが、『国民史のシンボルとして、鉄やダイヤモンドより強固に、花冠をもって祖国を奉じる』国民的記念碑にとって有効な先例であることは明白だった。」¹⁹⁾

トゥルナーによる国民的記念碑の建立に道を開いたのは、ヘルマン記念碑（1841～1875年建立）に導入された新様式であった²⁰⁾。1848年革命の最中に資金繰りの悪化で中断されたヘルマン記念碑の建立は、イタリア統一がドイツ国民の情熱を駆り立てていたときにドイツ議会から支出が承認され、完成される。1841年の起工時には男子合唱団、射撃協会、トゥルナーたちによってヘルマン記念碑を前にした盛大な式典が催されている²¹⁾。

ヘルマン記念碑以降、国民的記念碑には記念碑を取り囲んで催される式典が不可欠なものとなり、資金調達は国家ではなく「愛国心を表明したい特定の国民集団」²²⁾によって賄われていく。このことは国民的記念碑の歴史にとって重要な意味をもっていた。ひとつには国民的記念碑を建立するための経済的基盤が経済合理性から「記念碑建立のための寄付」という文化的要因へ、国家から民衆へと移行したことであり、ふたつめには民衆に統一性をもたらす祝祭が国民的記念碑の周囲で催されるようになったことである。「ヘルマン記念碑の歴史は、いわば19世紀ドイツ国民主義の道程を映し出している」²³⁾といわれるように、それらふたつの特徴は以後の国民的記念碑の大きな特徴となっていく。

トゥルナーたちは、ライプチヒ開戦記念²⁴⁾として建立された「諸国民戦争記念碑」（1894年～1913年建立）に多大な寄付をよせている。諸国民戦争記念碑にはトゥルンフェスト（体操祭）のための広大な外苑がもうけられ、国民的な祝祭として国民体操演技が計画された。記念碑の姿形には古典主義的なものとゲルマン的なものが結合させられ、周囲にはドイツ柏が植えられ、森はドイツの偉人たちの埋葬地として捧げられている。ヤーンは19世紀の始めに「神話とシンボルの不可欠な要素として歴史的記憶が強調」されるような働きかけの有無によって「自然な祝祭」と「人為的な祝祭」との相違が生まれ

ると述べていたが²⁵⁾、諸国民戦争記念碑にはヤーンのいう「歴史的記憶」が刻まれたわけである。「体操家は、自分たちこそ国民的再生の触媒たらんと考えた。ヤーンはそうした考えをただちに公的祝祭と結びつけた。彼とアルント（愛国的詩人）にとって、公的祝祭は愛国精神の機能に決定的な意味をもった。『体操運動がなおざりにされたため、ほとんどすべての民衆祝祭は消滅するか退化してしまった』とヤーンは述べた。また『歴史的に記憶されるべきことは男性的な力のスペクタクルによって覚醒され、祖先の誉れの行為は体操競技によって再生される』。何ゆえにそうなるのであろうか？『混沌とした民衆運動が祝祭を創り出すことはなく、不定型の群集はお祭り気分を生むにすぎない』。偉業とシンボルは群集に精神的連続性を保持させるために不可欠なものであり、さもなくば単なる乱痴気騒ぎにすぎない。ヤーンは効果的な国民的儀礼への関心から体操運動を創出した。（中略）ベルリンっ子たちがハーゼンハイデに宙返りを見学に行ったとき、彼らは実際には国民的祝祭へ参詣していたのである。（括弧内引用者）²⁶⁾ それ以後もトゥルネンの競技会はキフホイザーや諸国民戦争記念碑といった国民的記念碑を中心に計画されている²⁷⁾。国民的記念碑はトゥルネンの舞台装置となったのである²⁸⁾。

1817年にヴァルトブルク城で催されたトゥルナーたちの祝祭は、非ドイツ的な書籍が火に投じられ、ドイツ民族を称揚する演説が行われたことで有名であるが、その祝祭はキリスト教に範を仰で行われている。「ヴァルトブルク城での祝祭に関する記述を読めば、賛美歌に終始したことがわかる。つまり、ルターの『我らの神は堅固な城なり』で始まり、いわゆる『オランダ感謝祈念』で終わった。この祈禱文は閉祭の賛美歌として、ほとんどすべての国民的祝祭で歌われ、実際に伝統ある愛国的『定番』となった。ヴァルトブルクでは入祭の賛美歌が炎を取り囲んで歌われ、続いて（礼拝の参入唱で）正義とドイツ柏の森について歌われた。さらなる歌の後で、何よりも愛国的な説教と評される演説が行われ、この祭典の趣旨が明確にされた。ここでの『信仰宣言』は燃え立つ信仰の表明であり、参会者全員が手を握りしめ、盟約を破ることはないと言言を行った。そのあいだ中、アイゼナッハ近郊の教会は伴奏の鐘を響かせた。』²⁹⁾ トゥルネンの祝祭は古代

ギリシア・ローマの過去だけではなく、キリスト教にも彩られていたのである。

祝祭におけるキリスト教の参照は「人間の徳性を強める」という側面に効果を発揮する。ヤーンが登場してくる18世紀のプロイセンにはすでに敬虔主義の風潮が存在していたが³⁰⁾、敬虔主義は民衆にとって、万人の靈魂に内在する「祖国」と「キリストの精神」を融合させるものとみられ、敬虔主義が強調した共同体体験はキリスト教的愛と同時に祖国への愛とみなされていた³¹⁾。この敬虔主義にヤーンはドイツの歴史意識を吹き込む。「ヤーンは民族が歴史に覚醒することを、人間がキリストの精神に覚醒することと引き比べた。ヤーンの表現を借りれば、どちらもあらゆる創造性の源泉であるというのだ。彼が模範としたものは古典古代の祝祭ではなく、ゲルマン人の勲功祝典であった。（中略）ヤーンにとってギリシア人とゲルマン人はともに『聖なる民』であり、実際にはギリシア的な美の概念がゲルマン的シンボルで取り巻かれているにもかかわらず、ギリシア的な美の概念が一つの理想型であることには変わりなかった。（括弧内引用者）³²⁾ キリスト教の参照は「神聖な」という言葉をヤーンが好んで用いた事実からも窺える。「ヤーンは効果的な国民的儀礼への関心から体操運動を創出した。こうした儀礼が混沌とした群集を『神聖な行為』を通じて規律づけられた大衆に導くことができる、とヤーンは理解していた。それゆえ、体操訓練が行われた場所は初期においてさえ、ただの草原ではなかった。ヤーンが『聖なる技芸と精神』と称したものは、それに応じた環境を必要とした。最初に体操の訓練を行った[ベルリン郊外の]ハーゼンハイデを、彼は古代ゲルマンの集会場にちなんで『ティー』Tieと呼んだ。』³³⁾

ヤーンは古代ギリシア・ローマ・ゲルマンの過去とキリスト教を参照しながら³⁴⁾、「伝統としての祝祭」を発明することで、トゥルネンに民衆を惹きつけ、トゥルネンをひとつの大衆運動にまで発展させたのである。トゥルネンには「歴史的連続性の感覚や、有機的全体の中に生きているという意識が注入されていた」³⁵⁾のであり、その結果、トゥルネンは大衆を巻き込んだ運動として見事な成功をおさめるに至ったのである³⁶⁾。「1820年に、体操家協会はプロイセン体制への敵対を理由に禁止されたが、この

弾圧は構成員数の増加をもたらしたに過ぎない。何度かの揺り戻しはあったものの、1848年以後構成員数は急上昇した。1863年の社会階層の内訳によれば、最大多数は職人と商人であることが明らかになった。手工業労働者と工場労働者は構成員の6.68パーセントを占めたが、一方、芸術家、学者、学生は2パーセントにも達しなかった。確かに学生の優位は崩れて住民各層を含む構成となったが、それでもなお合唱協会の構成ほどには均整がとれていなかった。しかし、この統計的内訳は労働者の参加数を過少評価しているかもしれない。というのは、1880年代、90年代までに労働者の間で体操がいに普及していたかは、周知のことである。いずれにしても、体操ブームが大衆運動に発展したことは確実である。³⁷⁾かくして自発的に祝祭に集った民衆に「国民主義」を浸透させるという手法で、ヤーンは近代ドイツにおける「個人的自由」と「国民主義」との薄弱な繋がりを克服していった³⁸⁾。

だが、1848年革命はトゥルナーたちにも「反動」の余波を浴びせかけている。1848年革命以後の反動体制についてはすでに多くが指摘されているが、モッセの考察において止目しておくべきは、1848年革命以降、トゥルネンのシンボルが表現していた「国民主義」が排他的な要素をもつ「民族主義」へと変容せしめられたことである。モッセは1848年革命を「ドイツ史の一部として重要ではあるが、神話、シンボル、そして大衆運動の歴史における意義は小さい」³⁹⁾としながらも、1848年革命による民族主義の台頭を強調する。「1848年ヤーンは『ユダヤ人は民族に根ざさない民主主義を助長する』という主張を受け入れて、寛容を拒絶した。民族という概念がいまや前面に登場した。1848年設立の『ドイツ体操家同盟』は『民族の統一と団結』を宣言した。もはや自由はそれ自体の価値として了解されることなく、ただ民族統一によってのみ自由は生み出されるとされた。革命派であったメンバーは排斥されたのである。』⁴⁰⁾ トゥルナーたちを強力に支配していくこの民族主義は、ノイエンドルフの時代に最も拡張され、ナチズムに連なる経緯もよく知られたとおりである。

4. 肉体美・体操服・歌・聖火

トゥルナーたちによる「伝統の創造」は、国民的

記念碑・公的祝祭だけではなく、肉体美・体操服・歌・聖火にまで及んでいる⁴¹⁾。

体操服は一般に動きやすい服装として機能的に創出されたものと考えられがちである。しかしわが国で使用されている体操服を考えてみても容易に理解されるとおり、実用性だけならば、ことさらに「白」を基調とした体操服が用いられる理由はない⁴²⁾。これは体操服を経済的観念から捉えた解釈にも当てはまる。経済的な視点から体操服を捉えた三浦⁴³⁾がいうように、体操服には規格大量生産のための身体の画一化という側面もあったのであろう。だが、三浦の解釈でもやはり、特定の色やかたちが選択されてきた理由は明らかにならない。体操服にはシンボリックな意味が付与されていたのである。

モッセはヤーンが考案した体操服にしても、肉体の理想像にしても、そこに古代ギリシアの記憶が重ねられていたことを繰り返し強調している。「美のギリシア的理想が際だっていた。つまり、それは鍛え抜かれたしなやかな男性の肉体を理想としており、その肉体の輪郭はヤーンが弟子の体操家のために創案した制服によって特に顕著に表現された。この理想的な体操家の特徴も、個人的資質と体操家集団の民族精神の賜物であった。』⁴⁴⁾「体操は、ドイツ解放の戦士を鍛えるために支持された。しかし、この自由の戦士が有能であるためには、美学と個性、つまり個人の独自性との間のいかなる区別も許さない美の理想と、すべてのドイツ人を統一する美の祭祀を、自由の戦士が体現しなければならなかった。着用が義務づけられた体操服が考案されたのは、体操家の貧富の差を解消するためでもあり、また体操をよりしやすくするためでもあった。しかし、制服にはまた別の機能もあった。その簡素さは、古典古代の美の概念に由来する形式の厳格さをも象徴していた。』⁴⁵⁾あるいは「ヤーンが体操家のためにデザインした制服はゲルマン的であるのみならず、部分的にはギリシア様式に具現された美しい肉体への賛美に影響されたものだった。19世紀初頭の衣装に関する論文を読むと、国民的祭祀用衣装のシンボリックな価値が完全に理解されていたことがわかる」⁴⁶⁾等々。

1919年には民主的なワイマール共和国が成立するが、当時すでに「よき兵士をもたらす」⁴⁷⁾ことをトゥルネンの目標に掲げていたトゥルナーたちは、

ワイマール共和国に強い敵対心をみせる。この敵対心はトゥルネンの祝祭的な側面の強化へとむかい、民族音楽やフォークダンスが体操祭に加わる。ここでもまた古代ゲルマンという歴史意識が覚醒されている。「体操家たちは憲法記念日のようなワイマール共和国の祝典に自分たちの祝祭をぶつけた。ゲルマンの英雄ヘルマンの祭典がトイトブルクの森で行われたし、盛大な祝典のうちにヤーンの胸像が『ヴァルハラ』記念堂に据えられた。今や体操祭典には礼拝式の特別な時間が組み込まれた。確かにこうした礼拝式は祝祭でお馴染みの構成要素になっていたが、今や特別な夕べの集い、いわゆる『精神の体操』がつけ加わった。ここに参加した全員が、古代ゲルマンの『サガ』やメルヘンを吟唱し、ドイツの歴史的事跡を繰り返し語った。同時に、燃え上がる情熱で民族音楽が歌われ、フォークダンスが行われていた。」⁴⁸⁾

肉体美・体操服が古代ギリシアから採られ、歌が古代ゲルマンの参照によって加えられたのに対して、聖火はキリスト教の参照から生まれている。「火と炎のシンボル表現は、原始に遡る。火と松明は悪魔と戦うのに用いられ、(しばしば宇宙または神に由来する炎の起源を象徴した稲妻によって連想されたが) 炎の力は天壤の事実由来するものだった。[古代の] 異教的ドイツではその関係が重要でなかったとしても、太陽崇拝と聖火との間に関係があったことは疑いない。復活節の蠟燭、炎の神聖化など、聖火のキリスト教による利用は同様に重要であった。(中略) 聖火は、すでに宗教的役割を担っていた。それは、崇拝のロマンティックな雰囲気醸し出す祭祀的儀礼の一部であった。」(括弧内引用者)⁴⁹⁾

肉体美・体操服・歌・聖火は、軍事モデルでも、経済モデルでも、実用的因襲によっても説明しきれものではない。それらは「想像上のゲルマン的伝統と美の觀念の復興」⁵⁰⁾によって民衆を惹きつけ、体操を大衆運動へと発展せしめた「民族的な伝統モデル」としての側面を考慮してようやく十分に理解できるものである。「国民主義の勢力は必ずしも賢著に軍事的モデルで生まれたわけではなく、むしろアルントとヤーンの時代には軍事的モデルの抑制」⁵¹⁾が追求されていた。「ドイツ人はゲルマン衣装を身にまとうべきであるとヤーンとアルントが提

案した動機は、軍事的模範というより歴史的連続性の覚醒であった」⁵²⁾のであり、「愛国者にとって体操は鍛えられた肉体、つまりよき兵士をもたらすものであったのみならず、常に国民的祝祭として想い描かれていた」⁵³⁾。

これらのシンボルが「国民主義」に、そして究極的には「民族意識」と結びついていく過程は先に述べたが⁵⁴⁾、一方でトゥルネンのシンボルは「市民的価値観」⁵⁵⁾とも結びついている。「国民主義」と相補的な関係にあった「市民的価値観」は、「まっとうなドイツ人」というステレオタイプを生み出し、性的な態度や自己管理に関わる暗黙の規律や規範を植えつけてきた。近代ドイツにおいては「国民主義」だけではなく、「市民的価値観」も民衆の統一性の獲得に重要な役割を果たしていたのであり、「市民的価値観」は新しい社会の混沌とした世界に安定をもたらした。

しかし、19世紀の始め頃までは身体の露出を性の濫費とみなしていた「市民的価値観」は、トゥルナーの体操服を敵視していた。ここに実用的因襲との端的な背反関係が窺われるが、この敵視に対してトゥルナーたちは古代ギリシアの過去を参照することで自らの正当性を主張している。「19世紀初頭、ドイツの体操家は身体運動が自由にできる特別な制服を着用していた。同時代の人々は、こうした制服を市民的価値観に基づく諸規範を脅かすものと見ていたが、その着用は古代ギリシャの競技選手とのアナロジーによって肉体美に訴えることでしばしば弁護された。(中略) 19世紀末に身体を再発見した人々は、官能性と性衝動をことごとく削ぎ落とした肉体美の例としてギリシャの手本を引用し続けた。」(括弧内引用者)⁵⁶⁾

ところが「古代ギリシア以来の伝統」を旗幟とすることで、19世紀末頃までには逆にトゥルネンは正統な価値の創出者として「市民的価値観」を牽引し始めている。「19世紀末以降、ギリシャと自然は、生命力ある人間的な裸体を容認する思想に結びついた。(中略) 体操家は国民的ステレオタイプの原型だったのであり、その男らしさと道徳意識は無垢なる自然とギリシャの美を反映したものとして人々に受け取られた」(括弧内引用者)⁵⁷⁾。その国民的ステレオタイプとは「青天白日の賛美とギリシャの模範とが混じり合って誕生した。すなわち金髪、碧眼、

白い肌⁵⁸⁾ だったのである。トゥルネンのシンボルは身体の正常と異常、国民的身体と非国民的身体とを生み出すまでに至ったのである。

トゥルナーたちの「友情」もまた、「市民的価値観」として「国民主義」と結びつく。ヤーンの『ドイツ民族精神』(1817年)は、国民主義と市民的理想である家庭生活、夫婦間の貞操を結びつけた。実際、戦闘に備えて訓練する体操家に求められたのは、無精、官能的快楽、無軌道な性的情熱などいわゆる若気の過ちを避けることであった。ヤーンやアルントが唱えた『同盟』は、個人の向上心を民族の理想へと方向づけた。また、美の概念は国民的ステレオタイプ概念となった。このステレオタイプは、すでに言及したギリシャ復興の特徴と並んで、解放戦争に由来する特徴を持っていた。戦闘態勢にある賢固かつ強靱な男性肉体の崇拝、すなわち男性性の崇拝が、友情崇拝に取って代わるべく名乗りをあげた。実際、ヤーンがデザインした制服によって体操家の体型が可視化されたように、ここにおいて肉体と精神の統一は決定的に重要であった。国民的ステレオタイプである男性美の国民的理想は、一方では情熱を抑制したが、同時に攻撃的な男性性を象徴化した。すなわち、『同盟』の理想は、友情から国民主義へ進化したのである。⁵⁹⁾

トゥルネンのシンボルとなった肉体美・体操服・歌・聖火⁶⁰⁾も、古代ギリシア・ローマ・ゲルマンそしてキリスト教を参照しながらドイツの「伝統」として創出されたのであり、そのことによってトゥルネンという祝祭の場において民衆たちは熱狂のうちに「民族主義的な国民主義」と「敬虔主義を背景とした市民的価値観」とを身に帯びていったのである。

5. 近代社会とトゥルネン

以上に我々は、モッセの一連の著作から「国民主義」と「市民的価値観」とを浸透させた「祝祭としてのトゥルネン」と「伝統の創造」とを抽出したわけである。しかし以上の抽出だけでは、従来までのトゥルネン解釈とモッセとの距離は明確でない。本節では、モッセのトゥルネン解釈にあらわれている彼の近代ドイツ認識を浮き彫りにすることで、従来のトゥルネン解釈とモッセの違いを明確にしよう。

近代解釈をめぐって提示される一般的な問いに、

「個人的自由」と近代的な「共同体的拘束性」(特に近代では国家の拘束性)との調和均衡に関する問いがある。前近代社会が王権を中心とする封建秩序によって支えられてきたのに対して、近代社会は封建秩序から解放された自由平等な個人の上に成立している。封建秩序の瓦解によって共同体感覚を失い、個人が自由意志の只中に投げ出されるとき、如何なる共同体性が要請されるのか。個人的自由と共同体的拘束性とは如何にして調和均衡されるのだろうか。

この問いに対して、従来の近代解釈は二項対立図式に基づく解答を提示してきた。封建秩序が「上からの権力」によって形成されたのに対して、近代社会は個人の自由意志に基づく「下からの権力」によって秩序が形成されたのだ、と。その理念型に依拠するかたちで、西欧近代にみられた「下から」の秩序形成が理想化され、わが国の「上から」の近代化が問題視されてきたことも周知の通りである。しかしながら、この解釈には幾つかの疑問が投げかけられている。ひとつには近代社会の秩序形成は「上から」と「下から」に明確に区分できるものなのか(純粋な「下からの秩序形成」なるものは現実に存在していたのか)。ふたつには「下からの秩序形成」は無批判に称揚できるものなのか⁶¹⁾。

近代解釈にみられる単純化は「上から/下から」という二項対立にとどまるものではない。一方では、政治・経済の変容とともに文化も変容するという政治・経済決定論が展開され、他方では、西欧近代に対抗させるかたちで地域的な伝統の復活が掲げられてきた。そこには「政治・経済から文化へ」「前近代から近代へ」という単線的・直線的な社会観・歴史観が潜んでいる。けれども「上から/下から」「政治・経済/文化」「近代/伝統」という二分法に基づいて、どちらかを他方に「従属」あるいは「対抗」させる対立図式は、近代の複雑性を看過する単純化を帰結させはしないだろうか。未曾有の進歩と病理現象とを顕現させた近代社会の特異性と複雑性は「上から」と「下から」の相補性、「政治・経済」と「文化」の両方向性、「近代」と「伝統」の重層性によって形成されてきたのではなからうか。我々は「今日なお確固として君臨している」⁶²⁾ 近代社会の特異性と複雑性を認めるところから出発しなければならない。

「歴史の複雑さ」⁶³⁾を強調するモッセは、近代ドイツにおいて民衆の統一性をもたらした「国民主義」と「市民的価値観」⁶⁴⁾は、「上から」の一方的な権力によって民衆の意識に浸透したのでも、「下から」の一方的な運動によって浸透したのでもないという。「政治の進路はビスマルクやヒトラーといった人間によって方向づけられた。しかし、大衆もまた簡単には無視できない存在であった。(中略)多くの民衆が組織された政治勢力に編成されたが、この政治勢力は確かに民衆が共有した秩序、幸福、そして国民統一への願望を表現するものであった。」(括弧内引用者)⁶⁵⁾近代ドイツにおいては、大衆運動や家族的⁶⁶⁾な連帯こそが「国民主義」と「市民的価値観」を際立たせていたのであり、民衆の統一性は「国家」の権力と民衆の「心性」⁶⁷⁾の相補性によって形成されたのである。

視覚中心の大衆社会において「国民主義」と「市民的価値観」の浸透は合理的精神に根ざした著書や思想ではなく、政治・経済からは距離をおき、様々な矛盾を内包した「文化」⁶⁸⁾的な神話・シンボル・祝祭によっていた。近代社会は「ヘーゲルやマルクスのように合理的論理的に構築された体系」⁶⁹⁾によって説明され尽くされるものではなく、錯綜する矛盾的感情をもつ民衆は、むしろ自律的な文化構造のなかで神話・シンボル・祝祭に酔い、熱狂し、「国民主義」と「市民的価値観」を身体レベルに浸透させてきた。近代社会において「世界の統一的把握を可能にし、ばらばらに分裂した国民に共同体感覚を回復させる」⁷⁰⁾神話は、非論理的な世界を表現する唯一の手段であったシンボルの使用によって操作され、それら神話とシンボルを高揚する祝祭は、近代社会の権力構造に民衆が参与する具体的な場を提供したのである。

では、なぜ自由意志をもつ民衆は神話・シンボル・祝祭に魅せられ惹きつけられたのか。そこに「伝統の創出」がある。発明された「伝統」は従来の社会秩序の崩壊と新しい社会の登場に不安を感じていた民衆に帰属意識と安心感を与えた。「革命ごとに、新しい政治形態、新しい神話、新しい祭祀は生まれた。今や古き伝統を新しい目的に合わせて脚色することが必要だった。祝祭、ジュスチャー、そして形式が、新しい伝統と成り代わるべく創造されねばならなかった」⁷¹⁾。なかでも、視覚に訴える「美」

に関する伝統が民衆を魅了した。過去を参照しながら創出された美観によって、民衆は自発的に「永久普遍の美」としての神話とシンボルに魅せられ、熱狂していったのであり、「国民主義」と「市民的価値観」のシンボルは民衆に国家と市民社会への帰属意識を浸透させたのである。

しかしそれでも神話、シンボル、祝祭は単なる政治的装置ではなかった。神話、シンボル、祝祭は自律的な文化領域の要素によって、とりわけ芸術的な美的要素によって構成されていた。「過去の隠蔽と制御は、神話とシンボルによって達成された。(中略)政治は、神話とシンボルに基づくドラマにならざるを得なかった。それは、あらかじめ決められた美の理想によって一貫性を与えられたドラマ」(括弧内引用者)⁷²⁾だったのであり、「国民主義運動であれ労働者運動であれ、政治的態度表明は世俗祭祀となり、世俗宗教の儀礼として、美学的理想を表現する神話とシンボル表現で覆い尽くされた」⁷³⁾のである。

モッセにおいて、近代的な個人的自由と国家的拘束の調和は「上から/下から」「政治・経済/文化」「近代/伝統」という二分法に基づく一方向的ベクトルによってもたらされたのではない。それらは両方向的な権力作用によってもたらされたのであり、近代ドイツにおいてはトゥルネンの神話・シンボル・祝祭による「国民主義」と「市民的価値観」との浸透がその調和形成に重要な役割を果たしていたのである。

6. 結 論

前近代的な共同体を解体し、個人の自由意志の上に成立した近代社会は、祝祭における神話とシンボルによって個人的自由と共同体的拘束性の調和をはかる社会であった⁷⁴⁾。トゥルネンもかかる歴史的要請を帯びて登場する。

近代ドイツにおいて、ヤーンをはじめとするトゥルナーたちは国民的記念碑や公的祝祭だけではなく、肉体美・体操服・歌・聖火に古代ギリシア・ローマ・ゲルマンとキリスト教の記憶を重ねながら「民族の伝統」としてのトゥルネン(ゲルマン民族の伝統として継承されるべき記念碑・祝祭・肉体・体操服・歌・聖火)を発明することで伝統的世界観の喪失に不安を覚えていた民衆を魅了し、「国民主義」

と「市民的価値観」の象徴によって、民衆に国家への帰属意識を浸透させていったのである。

本稿の課題と対応させていえば、①トゥルネンの儀礼性・象徴性は古代ギリシア・ローマ・ゲルマン・キリスト教の過去を参照しながら発明され、②トゥルネンはその儀礼性・象徴性によって、伝統と近代、文化と社会、民衆と国家が合流するひとつの場を形成したのである。

以上にみたモッセのトゥルネン解釈は、両方向的なベクトルから「祝祭としてのトゥルネン」を描き出している点において⁷⁵⁾、いわゆる二項対立図式を克服した点において、従来までのトゥルネン解釈を超えている。だが、幾つかの先行論文が指摘するように、トゥルネンは近代スポーツとの抗争⁷⁶⁾やオリンピック種目への参入を日論む力学⁷⁷⁾のなかで国際社会における軋轢と適応を経験してきた。そうした経緯からすれば、国内にむけられた伝統だけではなく、その伝統が国外へとむけて如何なるメッセージを発していたのかについても検討の余地が残るだろう。今後の課題である。

最後に、ホブズボウムが『創られた伝統』に書き記した一節を引いて本論文の結びとしたい。「伝統の創出の研究は個別の学問領域を超えるものである。この分野は歴史家と社会人類学者、そして他の人間諸科学の研究者を結びつけるもので、互いの協力なしでは適切な探求はなされないであろう。この本は主として歴史家の論文を集めたものである。他の分野の研究者にとってこの本が有益となることを望む次第である。」⁷⁸⁾我々はホブズボウムの研究成果を、モッセの研究成果を、如何に受け止め、如何なる協力をなすべきなのだろうか。

注および文献

- 1) フーコー、中村雄二郎訳、『知の考古学』。河出書房新社。1981。
- 2) エリアス、赤井慧爾他訳、『文明化の過程(上)』。法政大学出版。1977。及びエリアス、波田節夫他訳、『文明化の過程(下)』。法政大学出版。1977。
- 3) 丸山眞男、「幕末における視座の変革」(1965)。『丸山眞男集第九巻』。岩波書店。1996, p. 220。近代主義と評される丸山の言葉を、従来までの近代認識を覆したモッセ論のなかで引用することは奇異に映ずるかもしれない。しかしながら、丸山の思想は「近代主義」という特定のイズムに還元されない広大な射程を有している。また「うち」「よそ」という概念は「西洋」「東洋」という二項図式を表現したものであるが、近代的思惟様式という地平において近代科学の枠組みにも援用可能と考える。
- 4) 吉見俊哉、『メディア時代の文化社会学』。新曜社。1994, p. 39。
- 5) 上野千鶴子、『文学を社会学する』。毎日新聞社。2000, p. 249。
- 6) 「体育哲学」あるいは「体育原理」という名称もやはり、近代科学制度に基礎をおく制度名称に過ぎないのであるから、「本研究が如何なる意味で体育哲学の研究なのか」という問いは近代的な「専門主義」(上掲書, p. 215)の幣を拭えない。むしろ我々は「うち」「よそ」そして「たこつぼ型」(丸山眞男、「思想のあり方について」(1957)。『丸山眞男著作集第七巻』。岩波書店。1996, p. 155)といった近代的思考回路から離脱しなければなるまい。
- 7) 伊藤公雄、「スポーツとジェンダー」。井上俊他編著、『スポーツ文化を学ぶ人のために』。世界思想社。1999, p. 115。
- 8) エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編。前川啓治、梶原景昭訳、『創られた伝統』。紀伊国屋書店。1992, p. 9。
- 9) 前掲書, p. 10。
- 10) 前掲書, p. 408。
- 11) 実際、近代ドイツにおいて伝統的な価値観であると信じられていた「慎みある女性/力強い男性」というステレオタイプ(「女性は美と気品を体現しなくてはならなかったが、力強さは男性の特権であった。」ジョージ・L・モッセ、佐藤卓己、佐藤八寿子訳、『大衆の国民化』。1994。柏書房。以下『国民化』)も、「18世紀の貴族女性には馬鹿げたことに聞こえたことだろう。というのも、彼女たちの多くは美しいとは慎みのないことと思っていたからである」(ジョージ・L・モッセ、佐藤卓己、佐藤八寿子訳、『ナショナリズムとセクシャリティー』。1996。柏書房。p. 28。以下『セクシャリティー』)と指摘されている。
- 12) 前掲書, pp. 12-13。
- 13) 成田十次郎、「近代体育の成立と展開」。『体育史講義』大修館。1984, p. 88。より詳しくは、成田十次郎、『近代ドイツスポーツ史 学校・社会体育の成立過程』。不昧堂。1977, pp. 330-333。
- 14) 「国民的記念碑は、国民の自己表現の最も本質的外観のひとつを形成した。それらは国民シンボルとして民衆の意識に浸透した。」(前

- 掲書, p. 56).
- 15) 「そのほとんどが王や将軍たちの榮譽のために建てられていた。19世紀初頭ようやく、政治的および軍事的次元に文化的次元が加わり、詩人や作家の記念碑もそこに含まれるようになった」(前掲書, p. 57).
 - 16) 前掲書, p. 57.
 - 17) 前掲書, p. 57.
 - 18) 前掲書, p. 44.
 - 19) 前掲書, p. 51.
 - 20) 前掲書, p. 69.
 - 21) 「男子合唱団, 射撃協会, 体操家たちは, この式典でそれぞれの役割を演じた」(前掲書, p. 71.).
 - 22) 前掲書, p. 73.
 - 23) 前掲書, p. 69.
 - 24) プロイセンがナポレオン軍からの解放を勝ち取った戦い。そうした意味では近代ドイツの象徴。
 - 25) 前掲書, p. 77.
 - 26) 前掲書, p. 136.
 - 27) 前掲書, p. 85.
 - 28) 「体操家自身, 記念碑の敷地を彼らの儀礼に特別適した舞台設定とみなしていた」(前掲書, p. 140).
 - 29) 上掲書, 『国民化』, p. 90.
 - 30) 「ドイツでは敬虔主義が国民主義の内面化に直接的な影響を及ぼした」(上掲書, 『セクシャリティー』, p. 33) のであり, その敬虔主義は「猛烈に愛国主義的な代物であった。それは, 万人の靈魂に内在すべき『内なる祖国』と人間の内なるキリスト教を融合させようとするものであった。敬虔主義が特に強調した共同体体験は, キリスト教的愛の潮流にあるだけではなく, 祖国への愛にも見いだされた。この二つの愛は靈魂の問題であったが, しかし祭儀の枠組みにも取り入れられた。民族の祭典には当然, 気まじめで敬虔な雰囲気がかき込まれ, その情熱と熱狂においてルソーの祝祭とは区別された。人はキリストの内に兄弟であるのみならず, 愛国心において兄弟であった。愛国者たるもの, 人が愛し合うものの中に生きるがごとく, 国家の内に生きねばならぬ, とノヴァーリスの詩は呼びかけているが, 多くの敬虔主義者もこの信念を抱いた。ヤーンもアルントもそうした敬虔主義を背景に登場した。」(上掲書, 『国民化』, p. 86).
 - 31) 前掲書, p. 86.
 - 32) 前掲書, p. 87.
 - 33) 前掲書, p. 136.
 - 34) 近代ドイツにおいて神話は「ゲルマンの過去かあるいは古典古代の過去かのいずれによるにせよ新しい国民意識の基礎を形づくったが, 現実の歴史経過の外にあった」のであり, 「宗教的, キリスト教的世界観と結びついたが, 神話が依存した異教的過去によって, また神話を受け入れる者に約束された安易な幸福観によって, 神話は世俗宗教化していた」(前掲書, p. 17). トゥルネンもまた過去を参照し, その記憶を新しい政治に重ね合わせることで, 民衆を引きつけ, 熱狂させた。
 - 35) 前掲書, p. 100.
 - 36) 1818年のプロイセンには100あまりの組織と約6,000人のトゥルナーがいた。モッセによれば, その時期には全ドイツに12,000人のトゥルナーが参加していたと推定される(前掲書, p. 137).
 - 37) 前掲書, p. 137.
 - 38) ヤーンは「個人の自由や自主性と同じように国民主義を強調していた」(前掲書, p. 137) のであり, 「体操家は, 若者が自由意志で参加したドイツ社会の革新的エリート集団であった。その闘争が反動的なドイツの国王諸侯に向けらねばならないものである限り, 反権威主義は重要な原則であった。(中略) それにもかかわらず, 体操家における個人的自由と団結と国民主義のつながりは薄弱であった。この薄弱なつながりを強化するために, 総じて祝祭の祭儀は国民的シンボルを強調した。しかし, たとえばヴァルトブルク祝祭では焚書の際に反ユダヤ主義と並んで, 権威主義的な世界観への傾向が見られた。それにもかかわらず, 体操家の第一世代にとって, 国民主義への動きは(1841年以来の体操祭典で見受けられたような)地域主義の超克のみならず, [体操]組織内部の政治的見解の多様性をも伴っていた。」(括弧内引用者)(前掲書, p. 138).
 - 39) 前掲書, p. 27.
 - 40) 前掲書, p. 138.
 - 41) 国民的記念碑, 公的祝祭においてもヤーンは「伝統の創造」を強く意識していた。モッセは次のようなヤーンの言葉を引いている。「記念碑は, 時を超えていかなる敵の猛威をも耐えて存続するが, 民衆の魂の中に国民の歴史が生き続けなければ生氣なきものとなるだろう」(前掲書, p. 44).
 - 42) 女子の体操服「ブルマ」に関わる一連の社会風潮がまさに「象徴的」な出来事であろう。それまで女子の体操服として機能的と思われていたブルマも, 「ブルセラ」というブルマを性のシンボルとするような現象が出現して以来, いとも容易く多くの学校で「短パン」へ

と変更された。こうした現象は体操服が「象徴」的な意味合いを多分に含んでいることを示唆している。

- 43) 三浦雅士、『身体の零度』。講談社選書メチエ。1994, p. 198.
- 44) 上掲書, 『国民化』, p. 136.
- 45) 前掲書, p. 38.
- 46) 前掲書, p. 54.
- 47) 前掲書, p. 141.
- 48) 前掲書, pp. 142-143.
- 49) 前掲書, pp. 52-53.
- 50) 前掲書, p. 94.
- 51) 前掲書, p. 94.
- 52) 前掲書, p. 93.
- 53) 前掲書, p. 141.
- 54) 「身体文化は、裸体を人種的に強調すること抜きに、体操の父ヤーンがその弟子たちに奨励して以来ずっと、フェルキューシュ運動と同一視されてきた。実際、ヤーンが創造したドイツ体操協会は、この一般的運動の一部となった。体格を強調し強さを称えるのも、体操家の哲学の中で紛れもない底流であった。体操は、内外の敵に対する闘争においてアリア人の肉体を強固にしたのである」(ジョージ・L・モッセ、植村和秀他訳、『フェルキューシュ革命』。柏書房。1998, p. 158).
- 55) 「市民的価値観」とは、①性や礼儀作法に関する今日まで正常な道徳意識とされてきた価値観。②特に「身体」に関する正常/異常の区別を生み出す。例えば異性愛/同性愛、アリア人/ユダヤ人など。③近代社会における中産階級の覇権掌握とともに広がった。中産階級は「市民的価値観」によって貴族階級と下級階級の両者から自らの位置を守ろうとした。④その定着には18世紀の宗教復興が決定的な役割を果たした。ドイツでは敬虔主義を背景に「市民的価値観」は宗教的真理として定着していった。⑤国民的合意の確信によって社会規範を正当化し(下から)、宗教や国民という普遍的真理の力によって聖別され(上から)、医師、教育者、警察の実践的技術によって社会的に強化された。⑥その定着には「国民主義」が決定的な役割を果たした。「市民的価値観」と「国民主義」とは相補的な関係にあったのである。例えばドイツ国民のステレオタイプとしての肉体美といったように。
- 56) 前掲書, p. 64.
- 57) 前掲書, p. 66.
- 58) 前掲書, p. 69.
- 59) 前掲書, p. 101.
- 60) 「歌唱、トランペットの勇壮な調べ、簡潔な演

説、聖火、これらすべてが体操祭典を構成した」(前掲書, p. 136).

- 61) 例えば今井弘道は「戦後民主主義の問題性」と題する論文のなかで、「〈下からの権力形成〉の帰結として成立した権力には直ちに正統性を承認すること」は、少なくとも現在においては問題視されねばならないといい、その理由に「絶対的権力を問題化し、それを解体しようとする発想」によって実現された「地方政府もまた、いかに民主的なものであれ、権力であることに変わりはない。それに対して抵抗することが必要になる場合がないわけではない」と論じている。今井弘道、『戦後民主主義の問題性』。姜 尚中他著、『丸山真男を読む』。情況出版。1997, pp. 40-42.
- 62) 上掲書, 『セクシャリティー』, p. 239.
- 63) 上掲書, 『国民化』, p. 29.
- 64) 「市民的価値観」とは、後に詳しく論じるように、性や礼儀作法に関する今日まで正常な道徳意識とされてきた価値観を指している。上掲書, 『セクシャリティー』, p. 9.
- 65) 上掲書, 『国民化』, p. 221.
- 66) 「家族の理想と公的なシンボルは、相互に補強し合っていた」(上掲書, 『セクシャリティー』, p. 30) のであり、「医師(往々にして家庭主治医)、教育者、そして国民国家そのものの指導の下で、家族が性的統制の不可欠な代行者であり巡回警官の役割を演じた」(前掲書, p. 32)。またヤーンに関する次の記述も重要である。「体操協会と学生組合運動の創始者であるフリートリヒ・ルードヴィヒ・ヤーン [1778-1852] は、かつて家族を国民精神の源泉と呼んだことがあった」(前掲書, p. 31)。
- 67) 例えばモッセの著書ではスポーツを戦争に喩えたアンリ・ド・モンテルランの「オリンピック」を参照しながら、戦争時にみられる「友情」とスポーツにみられる「友情」とを同列視した記述がある(前掲書, p. 162)。体育学者であれば当然このような記述に物申したところであろうが、モッセが焦点化したのは記述内容の論理性や合理的精神についてはなく、それが著された時代の「心性」である。
- 68) 「政治理論の伝統的規範のもとに包括できない文化現象」は「哲学的著作の理路整然たる分析で理解可能な、論理的または一貫したシステムとしては構成されてはいない」。「文化現象は、世俗宗教、つまりは、原始時代あるいはキリスト教の時代から続いたものであり、神話とシンボルをとおして世界を見、祝典と祭儀の形式のうちに希望や恐れを表現す

- るものであった」(上掲書, 国民化, p. 225).
- 69) 前掲書, p. 20.
- 70) 前傾書, p. 17.
- 71) 前掲書, p. 13.
- 72) 前掲書, p. 19.
- 73) 前掲書, p. 56. 「伝統の創造」は民衆を魅惑するのに役立ただけではない。「伝統の創造」は工業化によって急速なテンポで流れ始めた近代の時間のなかで人々が混沌に陥ることを避けるのに役立っていった。「歴史に問いかけるのは、時間を整然とまとめ、その速度と折り合いをつける一つの方法だった。かくして歴史の強調は、神話とシンボルに必要だっただけではなく、より急な時間の流れの中で秩序を保つことにも役立った」(前掲書, pp. 223-224).
- 74) この事態は吉見の次の言葉を想起すれば理解しやすい。「近代はマツリを発明した。すなわち近代は、けっしてたんに『伝統的』な社会から受け継いできたもろもろの祭りや儀礼、祝祭的な場面を規律=訓練的な権力によって抑圧し、排除していったのではない。むしろ近代は、一方ではそうした規律=訓練的な権力を私たちの日常生活の隅々にまで深く浸透させながらも、まさにそうした戦略をマツリの発明と再編、人々の日常性と非日常性についての新たなフォーメーションの創出を通じて達成していったのだ。」吉見俊哉。「ネーションの儀礼としての運動会」, 吉見俊哉他著『運動会と日本近代』, 青弓社, 1999, p. 8.
- 75) モッセ以前にも、とりわけ体育学領域の研究においても、トゥルネンの儀礼的側面に言及する解釈は存在していた。しかしその側面を「国民主義」と「市民的価値観」といった「近代社会からの要請」と同時に「近代社会の成立要件」と結びつけて解釈するものはなかった。つまり社会/文化という二項対立図式の克服である。
- 76) 例えば以下の文献。アレン・グットマン、谷川 稔他訳、『スポーツと帝国』, 昭和堂, 1997. 唐木国彦, 「トゥルネン=スポーツ抗争」と労働者体育家連盟, 一橋論叢, 77-1号, 1977, pp. 21-40. 成田十次郎, ドイツ体育連盟の発展, 不昧堂, 2002, pp. 209-260.
- 77) ここでの問題関心とは異なるが、「セクシャリティー」の訳者あとがきに寄せられた佐藤八寿子の一文は現代におけるスポーツと「祝祭」の関係を考えるうえで示唆的である。「オリンピック百年の今夏、テレビに映るアトランタの光景の折々に、意識無意識のうちに『ナショナリズム』を感じさせられた方も多かったのではないだろうか。ピエール・クーベルタン男爵 [1863-1937] によるオリンピック競技復活の提唱—それは、本書や『大衆の国民化』でも再三問題となる『ギリシア復興』という一大潮流の中の『伝統の創出』のひとつだった。少年時代に普仏戦争の敗北で味わった屈辱と憂国の情を忘れることのない。だが、次回オリンピックの年、男らしさの尊ばれたこの世紀も幕を閉じる。そして、近代オリンピック百周年のアトランタで特に印象的だったのは、私見では、男性もさることながらむしろ女性たちの活躍の数々だった。」(前掲書, p. 250).
- 78) 上掲書, ホブズボウム, pp. 26-27.